
V S ログ・ホライズン

『ログ・ホライズン』の作者さんとは関係ありません。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VSログ・ホライズン

【NZコード】

N6182M

【作者名】

『ログ・ホライズン』の作者さんとは関係ありません。

【あらすじ】

この小説は、フィクションであり、実在の人物団体とは全く関係無いです。もちろん、実在のオンライン小説とも関係は無いです。

1つめ

「ログ・ホライズンを越えたいんです」
その言葉を口にした僕は、自分でも何を言つてるんだと思った。
自分がそうなのだから、相手はもっと意味がわからないだろう。
そうして僕は無事に退職した。いや無事では無いかも知れないが、
退職することには成功した。

ログ・ホライズンはページビューが300万を越える、モンスター級のオンライン小説だ。作者は『自動筆記マクロ』らしい。マクロは簡単なプログラムのようなものであるが、本当に自動で動くマクロだということは無いだろうし、どこかに作者がいると思つ。しかし、その作者の存在は謎に包まれ、それがまた大量のファンの心を離さない理由の一つでもある。

僕がログ・ホライズンに出会ったのは4月の事だ。寒いと暑いの極端な日が続き、久しづりに温かな春を感じた。ログ・ホライズンのキャラクター達が予期せず、『エルダー・テイル』の世界に巻き込まれてしまったように、僕も思いがけずにログ・ホライズンの世界に巻き込まれてしまった。

ログ・ホライズンは、オンラインゲーム『エルダー・テイル』の世界に、プレイヤー達が召喚されてしまうという、異世界召喚ものの小説である。

僕は、最初の1ページ目を読みはじめた瞬間、強制的にログ・ホライズンの世界に引きずりこまれた。それはあまりに唐突な感覚で、『ハマつた』という感じすらわからなかった。ログ・ホライズンの主人公、『シロエ』がエルダー・テイルに召喚されたような感覚とい

うのも似たようなものだったのではないかと思つ。

そう、僕はあの瞬間、間違いなく『ログ・ホライズン』の世界に召喚されたのだ。

ログ・ホライズンの部隊とナルオンラインゲームの『エルダー・テイル』は、『MMORPG』と分類される。MMORPGとは、『多人数のプレイヤーが同時に同じ世界に参加しプレイするRPG』のことで、代表的なオンラインゲームの一つだ。『ウルティマオンライン』や『ファイナルファンタジーEX』など多種多様なタイトルが世界中でプレイされ、その熱中度が社会問題になることがある。

ログ・ホライズンの世界に魅了された僕は、いくつものオンラインゲームを漁つた。巨大掲示板『2ちゃんねる』や、SNS『mixi』、検索サイト『Google』を活用して情報を集め、あまり行つた事の無い秋葉原のいくつもの店を歩き、尋ね、エルダー・テイルを、エルダー・テイルに近いゲームを探した。4月の半分を費やした搜索活動は、遂に打ち切りとなつた。

僕はどうしても諦められなかつた。エルダー・テイルをプレイしたかつたし、欲をいえば僕もエルダー・テイルに召喚されたかつた。でも、そんなことは現実には訪れなかつた。

そのうち、僕の頭の中は一つの答えがうつすらと浮かんでくる。

「作ればいいつ！」

無ければつくればいいのだ。そんな単純な事に気づくのに2週間もかかっていた。ゲームのシナリオや設定などは、既に小説として公開されている。僕は悩んだ末に一筋の光明を見つけ、パソコンの液晶画面を見つめる顔が思い切りにやけているのを感じた。しかし、その一瞬後、現実に強く打ちのめされる事になる。

(……作り方がわからない)

恐らく、プログラムを組めばいいのだろう。だが習得までに何年かかるのだろうか。自分にあまりセンスがあるとも思えない。しかも、エルダー・テイルの目玉である『高精細なグラフィック』というのがある。3Dのポリゴンなど、どうやって作られるのかもわからぬ。絵も棒人間を書くのがいっぱいぱいだ。

ログ・ホライズンに出会い、2週間が経過している。目標は、目指す前に消えようとしていた。

「篠原さん！僕と一緒にネットゲ作ってください！」

「何を言つてるんだ君は」

篠原さんは、職場の先輩だ。いや、もう既に僕は退職してしまっているから、元先輩とでも言えればいいのだろうか？歳が一回り以上離れているし、人生の先輩とも言つておけばいいだろう。

篠原さんは、こう見えて前職はネットワークエンジニアだ。サーバ構築とやらが得意技らしい。簡単なプログラムなら作れるって話も聞いた事がある。だが、前職を離れてからしばらく経つせいか、最近の技術には疎いとの事だ。

「君は、ネットゲを作るために仕事をやめたのか

「はいっ、そうです！」

篠原さんと僕は、いわゆる飲み仲間というものに近いだろう。先輩とはいえ、部署が違うおかげか直接的な上下関係になったことはない。ただ、酒好きといつ点が共通していたせいが、とても懇意にして頂いている。

「へえ、ちょっと面白そうだな

(……！)

なんと意外にもちょっと乗り気だ。普通は、即効で断るか、説教が始まるとか、話題をそらされるかのどちらかだろう。何度も確認するが、僕はもう退職しているのである。今は、個人的に篠原さんと飲んでいるだけだ。深夜3時半、テレビではワールドカップの日本戦が流れて始めた。日本対デンマーク、正直引き分けがいいところだろう。負けても驚きはしない。先日行われた、初戦のカムルーン戦では、運良く勝つことが出来た。運良く。今、日本全体は勢いづいている。本戦出場の希望が見えており、開始5分ミスらしいミスはしていない。僕もこの流れに乗り、篠原さんの口説き落とすつもりだった。

「一緒にやるか？」

篠原さんは、こやこやしながら、注がれた日本酒をくくくいと飲んでいく。

「俺もちょっと勉強しなおさないとな」

そして、またくいと飲んでいく。前半17分、テレビでは日本が先制したようだ。

(……スルーされると思つてたんだけどな……)

篠原さんは酒に強い。しかも何でも飲む。今日は、元の職場の飲み会にお呼ばれされ、その帰り、二次会を篠原さん宅で一人で飲んでいる。今日の篠原さんは、最初のビールの次は日本酒ばかりだった。もううらぐらいだろう。日本がまた1点いたようだ。

「んわ。入った? んー」

篠原さんは、完全に寝る体制に入った。

(……やっぱり酔つてたか)

試合は、3点1で日本が勝つた。こつして勝ちきる試合は最近では珍しい。僕の今日の感触も上々だったように思える。篠原さんがちゃんと覚えていれば。

明け方、眠る篠原さんに声をかけ、家を出た。

外は、もう明るく、通学する子ども達の声が朝を寒感させてくれる。まだ涼しい時間帯であるが、今日もこれからぐんぐん気温が上がっていくことだろう。

6月、梅雨まつただ中というのに、そこまで雨は多くない。なんとなく、今年の夏は暑くなるような気がする。

貯金はまだ手を付けてない。時間もある。どこまでやつてくれるかわかんないけど、とりあえず協力者もいる。勢いだけで退職した割に、順調に事が進んでいくように思える。

(……今年の夏は、もう既に夏にしてやる。)

退職直後の開放感は、向でも出来ゆきづな気がする。

だが。この時にまつひとつも問題の影がちらついていた
のだった。

3つめ

(……もう6月も終わるな)

僕がログ・ホライズンに出会い、もう2ヶ月が経ち、退職してから2週間が経とうとしていた。

この2ヶ月は、本当にあつという間に過ぎていった。退職を申し出て退職するまでの間に、4月に入社した新入社員も配属され、季節も暑い季節へと変わり、職場は四六時中バタバタしていた。僕は、その間通常の営業に加え、新入社員の教育、仕事の引き継ぎをこなし、残りはのんびり過ごそうといつ僕の希望は一欠片も叶う事は無かつた。

今は有給消化中であり、時間だけはたっぷりある。貯金もほどほどにある。

時間が無い時は喉から手が出るほど時間が欲しいものだが、いざその時間を手にしてしまつと持て余してしまつものだ。僕がログ・ホライズンを作ろうと決心してから、丸2ヶ月。事態は一歩も進んでいなかつた。収入が無くなつた分、後退していると言えるかもしれない。

(……参つたなあ。何から手をつけようか)

都内の大きい本屋を周り、技術書を立ち読みして周り、自宅のパソコンの前に書籍を山積みにしても状況は何もかわらない。

(……自分をバカだと思っていたが、これは手遅れみたいだな)

僕は焦つてはいなかつたが、自分でも何がしたいのか、はつきりとわかつてはいなかつた。当たり前だ、計画も無く、勢いで仕事を辞めただけで、オンラインゲームが作れるほど、世の中イージーモードではない。そうなると自然と、だらだら過ごして仕舞うことになる。僕の毎日は、滝のような勢いで消費され、無職、いや一ノートに相応しい生活を送るようになつていた。

そうなると、「るせー」のは親である。

僕の親は放任主義であった。大学を選んだ時も、就職先を選んだ時も、退職した時も全て事後報告だ。小言を言われないわけではないうが、「お前の人生だからな」の一言で、わがままな僕の決定を黙認してくれていた。退職した時もそうだった。

だが、自堕落な生活を送つている事がどこからか親に漏れたのか、珍しく親に呼び出しをくらうことになつた。

(……今更何をいうわけもないけど、ログ・ホライズンを作りたいって言つても通じないよな)

僕の親は、ゲームに理解が無い。両親とも、テレビゲームに触つた事が無いぐらいのレベルであり、何も言わないまでも僕がゲームをするのに良い顔をしたことがない。今回ばかりは、少し大きい小言を覚悟した方が良さそうである。

電車を乗り継ぎ、久しぶりに実家のドアの前に立つ。数カ月に一回は帰つてきているし、何も感じるものはない。寒がりの僕はこの時期でもまだ長袖であり、駅から少しあるこの家まで歩いて来ると、軽く汗をかく。その影響か、脇の下もじつとりと湿つていて。寒くはない、暑いのだが、なんとなく自分が冷えているように感じる。

「ただいまー」

玄関の戸を開け、靴を脱ぎ、リビングへ向かう。父親が、いつものように洋画を観てている。トランクスに、ランニングシャツを来た中年の父親は最近少し痩せたようだ。

「おう、呼んじゃって悪いな

語り口から、父親の機嫌は良さそうに思える。椅子に座りながらこちらに振り向き、自分の向かいにある椅子に座るように促してくれる。僕は、荷物を下ろしながら、椅子に腰掛け、カバンから取り出したペットボトルのお茶を飲み、口を温らせた。父親は、唐突に話しだした。

「お前に話があるんだけど、お父さん癌なんだ

「え？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6182m/>

V S ログ・ホライズン

2011年5月17日05時26分発行